ワカクハ　若桑　鳳至郡粟蔵の内の小字。

ワカサヤ　若狭屋　加賀藩では元祿十五年七月十三日の令によつて、若狭屋と稱する町人の家名變更を命じた。こは當時藩の世嗣前田吉德が若狭守であつたによる。

ワカスギ　若杉　能美郡輕海郷に屬する部落。

ワカスギカマ　若杉窯　能美郡若杉の人林八兵衛の起した陶窯で、文化八年には本多貞吉が春日山窯から移つて之に從事し、京都の寅吉、平戸の平助、金澤の八兵衛・九兵衛も亦來り、十四年德島の人勇次郎が聘せられて赤繪を描いたが、文政二年貞吉の歿後經營漸く困難となり、五年之を金澤川南町の商人橋本屋安右衛門に讓り、安右衛門は藩から補助を得、若杉の苗字を許されて業務を繼續した。然るに天保八年陶窯の火災に罹るに及び、之を八幡宇土山に移築することゝなり、若杉窯の遺址には、陶工彌右衛門が別に新窯を起して、明治期まで繼續せられた。

ワカスギシヨウ　若杉庄　能美郡に在つた。蔭涼軒日錄に、永享九年萬壽寺領四ヶ所が加賀にあることをいひ、そのうちに若杉庄もある。後の若杉村附近であらう。

ワカスギヤエモン　若杉彌右衛門　能美郡若杉の陶工。文政元年本多貞吉に學び、天保八年若杉窯の八幡に移されるに及び、自らその遺址に陶窯を再興し、文久二年之をその子彌作に讓つた。

ワカスギヤサク　若杉彌作　能美郡若杉の陶工。彌右衛門の子。文久二年父の業を受けて若杉窯に從事し、明治二年諸國の陶場を視察して、大に陶土精練の法を改めた。

ワガタガタケ　輪形ヶ嵩　→ワガタニ　我谷。

ワガタニ　我谷　江沼郡奥山方に屬する部落。加越闕諍記天文廿一年朝倉宗滴の加賀に出馬した條に『更行くまゝに詠れば、秋篠や外山里、小俣・山代・桂谷・松山・横北・黒谷・九谷の奥山、輪形が嵩に見ゆる火は、晴たる夜の星の如し。』とある輪形も我谷の譌である。

ワカトウ　若黨　諸士に使役せられる陪臣で、平素家に在る時は袴を穿ち一刀で式臺番に當り、主人の外出する時は兩刀を帶し、足半（トカ）と稱する白緒で鼻緒の半に達する藁草履を穿ち、雨天の日には青色の合羽を着て、これに隨うた。若黨は士格であるから、足輕よりも上列と見られてゐた。

ワカドシヨリ　若年寄　加賀藩の重臣に年寄・家老・若年寄の階級がある。その若年寄は家祿三千石以下の人持組中、古參の者又は知名の者を採用し、定員はないが、凡そ二三名であつた。その職務は御用の間で裁決した事を藩侯に上申し、藩侯の下問を御用の間へ傳達する等の事をなし、又藩侯の内議に應じ顧問となることもあり、席は藩侯御居間の附近、御用部屋の次にあつた。若年寄の配下には御書物奉行等があつたが、加判その他の重任はなかつた。前田綱紀の時、老臣中衆心一致せず、爲に遠大の計畫を樹立すること能はざる實情であつたから、綱紀は政務を親裁する爲に、寛文九年三月廿五日若年寄の職を置き、横山志摩正房・奥村内匠榮尚の二人を拔擢してこれに補し、以て政令下達の任に當らしめることにした。これがその濫觴である。次いで延寶七年十一月奥村兵部惠輝、天和三年三月津田玄蕃孟昭、貞享三年十一月前田備前貞親・前田與十郎孝行・多賀新左衛門直方が命ぜられ、寶永四年六月本多圖書政冬等四人の御家老に轉じた以後暫く止んだが、享保元年七月二日中川式部長定・前田左京誠明が命ぜられた後再び連綿した。又同十一年九月廿二日本多頼母政恒が見習を命ぜられたのは、若年寄見習の初であらう。

ワカバヤシ　若林　永享三年六月廿七日附文書に、加賀國若林村を飯尾大和守貞連に宛行うたことが見える。今加賀に若林はない。森田平次の溫故古文抄の註に、若林は若林長門の本居なるべく、石川郡林郷に上林・中林・下林があるから、若林も亦同郷内であるかも知れぬと記してゐる。

ワカバヤシ　若林　鹿島郡江曾郷に屬する部落。

ワカバヤシウタノスケ　若林雅樂助　若林長門の子。一向一揆の徒。天正八年父と共に柴田勝家に佯殺せられた。

ワカバヤシジヨウガ　若林成我　金澤鍛冶町眞宗東派乘善寺十七代の住持。菩提院と稱した。嘉永二年得度、哲僧に宗學を習ひ、明治四年上洛して本山改革の事に隨ひ、次いで都講となり、七年令を受けて加賀教授を建て八年兒阿耨院隨緣退隱の後を受けた。九年三月金澤別院大火の際消防に努め、全身を糜爛して僅かに死を免れ、廿二年四月廿五日寂、享年六十二。

ワカバヤシズイエン　若林隨緣　金澤鍛冶町眞宗東派乘善寺十六代の住持。諱は現瑞、阿耨院と稱した。天保元年得度の後哲僧に就いて學び、九年高倉學寮に入つて寮司に進み、十二年父了德の後を襲ぎ、明治八年之を弟成我に讓つて專ら傳道の事に隨うたが、十七年異安心を以て本山の取調を受け、廻心狀を提出した。後廿九年學師に擢でられ、三十二年僧都に補し、三十五年六月二日七十八歳を以て寂した。

ワカバヤシナガト　若林長門　一向一揆の首領で、石川郡劍城に居た。天正二年本願寺顯如の命により、長門は越前に入り、七里頼周と共に軍事を督したが、三年八月織田信長は羽柴秀吉を派して一揆を討伐せしめるや、八月十五日秀吉は海を渡つて河野浦に上陸し新城を攻め、長門等之を防いだが敗れて遁走し、戰死二三百人に及んだ。總見記にこの時長門も亦歿したと記するのは誤である。長門は八年金澤御坊の陷落後も尚存命してゐたが、柴田勝家は之を討たんと欲し、十月七日自ら翠生に陣し、柴田勝政等をして柏野に進擊せしめた。長門は敵の先鋒と爭ふこと少許の後松任に退き、若し舊領を安堵するを得ば降を容れんことを申出で、勝政は佯つて之を許したので、長門は子雅樂助・甚八郎と共に、勝家の恩を謝せんが爲その本營に赴いた。勝家乃ち神戸仁久藏・溝口千熊・林彌五郎を一室に伏せしめ、長門の一禮するを待つて之を斬り、二子も亦別室で殺され、勝家は十一月二十日附の注文で、是等の首を安土に送つたといふ。併し關屋政春古兵談には、長門が越前丸岡に至つて柴田勝政に謁した際殺されたのであるとしてゐる。

ワカバヤシハンザエモン　若林半左衛門　初め溝口伊豆守政一に仕へ、後前田利常に來仕し、二百石を受けた。子孫相繼いで藩に仕